序論

1　本書の主題

本書は、二十世紀フランスの哲学者ポール・リクール（Paul Ricœur）の思索を統合的に理解する試みである。リクールは一九一三年に生まれ、二〇〇五年にこの世を去った。彼はその長い生涯を通じて倦むことなく著作を発表し続け、その量は膨大である。論じた主題も、自由、身体、悪、無意識、聖書、神話、隠喩、時間、物語、歴史、フィクション、アイデンティティ、イデオロギー、法、正義など多岐にわたる。そして一つの主題を論じるさい、リクールは時代を問わず「さまざまな学問分野の研究を縦横無尽に参照し、博引旁証の限りを尽くして考察した」［越門（2016）iv］。西欧の哲学史を自家薬籠中のものとしつつ、前世紀に勃興した反省哲学、現象学、解釈学の方法を基軸にして、同時代の精神分析、構造主義、分析哲学、アナール学派、脳神経科学、リベラリズムとの積極的な対話を進めるなかで、その著作群は生み出されたのである。リクールの哲学的思索の広大無辺ぶりは、彼の名前を知る多くの者が認めるところであろう（リクール研究と呼びうる著作のなかで、その事実に言

及していないものは存在しないとすら言ってよいのかもしれない)。ただし、それは裏を返せばリクールの哲学はとらえどころがないということでもある。いったいリクールとは何を主張した人なのか？　我々はなぜリクールの著作を読むべきなのか？　なるほど、このような問いは乱暴かもしれない。それでもあえてそのように尋ねるとき、我々はリクールほどその答えに窮する思想家はなかなか他に見当たらないという事実に思い至る。このとらえどころのなさは、リクール哲学の意義や魅力の伝わりにくさと無関係ではないだろう。そしてその伝わりにくさは、時間の経過とともにリクールの著作が忘れ去られていく原因となる。本書は乱暴な問いを進んで引き受けることにより、リクール哲学の個性と現代的意義をできるだけ多くの人に開き示したいと考えている。

リクール哲学を、無数の建築が立ち並び、さまざまな街区からなる大都市にたとえることができる。全体の設計図は存在せず、時間の経過とともに拡張を重ねてきた都市である。リクール研究とは、この都市の地図を描き、その歩き方を紹介することに相当するだろう。このとき、広大無辺な都市の全容を把握しようとして、縮尺の小さな地図で全体を俯瞰するというのは一つの方法である。たとえばリクールの著作を時系列で枚挙し、それぞれの主題を並列的に紹介していく。このような紹介により、読者は自分がどの著作から読みはじめるべきかを知ることができるようになる。ただし、特定の著作のなかでリクールがどのような論証を展開しているのかを知ることはできない。当然、著作の単位を超えた論証のつながりも見えてこない。哲学とはあらゆる理解に検討の余地のあることを認め、妥当な説明を求めて自問自答を繰り返していく営みであり、哲学の研究はそれ自身が哲学的な営みであるとするならば、リクール哲学の研究はリクールと問いを共有し、その論証の妥当性を批判的に検討していくことを必要とするはずである。縮尺が小さい地図は実際に歩き回ることには適さず、それによってリクール哲学を理解することはできない。それゆえ地図の縮尺を上げ、入り組んだ街路のつながりを把握できるようにする必要がある。たとえば一冊の著作に詳細な注解や解説を与えるというアプローチはこれにあたるだろう。そしてこの作業をひたすら積み重ねていくことにより、リクール哲学の全容が解明されることになるかもしれない。だが、きわめて詳細な地図を何枚も渡されたとして、そのことが都市を訪れる人間にとっての助けにな

るだろうか。これは街区同士のつながりや都市のめぐり方は自分自身で発見しろ、リクールとは何を主張した人で、なぜリクールを読むべきなのかという問いに対する答えは自分で発見しろと言っているのに等しい。縮尺が大きすぎれば、リクール哲学の理解はかなわない。では、どのようなアプローチをとればよいのか。

おそらく地図は二種類必要だろう。縮尺の小さな地図に求められるのは、もろもろの街区を結びつける幹線ルートを把握できるようにすることである（少なくともそれだけの縮尺の大きさは必要である）。もともとこのルートは、地図作成者兼ガイドが都市を歩き回るなかで浮かび上がってきたもので、実は他にもルートは存在している。ただしそれはガイドにとって都市の魅力をよく伝えていると思われるお気に入りのルートであり、彼はそれを他の人々に紹介しようというのである。さらに彼は、幹線ルートとの接続が失われない限りにおいて、縮尺の大きな地図で各地区の入り組んだ街路を紹介し、訪問者とともに街路を歩く（ときに地図が間違っていることもあるかもしれない）。このような方針のもとでガイドと共に歩くとき、はじめて旅人は都市を理解できたという感覚を得ることができるのではないだろうか。

比喩はこれくらいにしておこう。結局、本書が試みるのは、リクールの著作群を貫く主題を設定し、その主題との関連のなかで諸々の著作を読み解くことである。一連の著作によって組織された一つの体系としてリクール哲学を把握する視点を提示し、そのような視点から諸々の著作の論述を繋ぎ合わせていくと言ってもよい。本書にとってその主題とは〈人間の善き生と想像力〉という主題である。本書はこのような主題のもと、リクールの哲学的思索の統合的理解を試みる。この主題を問題として表現するなら〈人間が善く生きるうえで想像力はどのような役割を果たしうるのか〉という問いになるだろう。この問いに答えるためには、人間とはどのような存在であるのか、人間にとっての善き生とはどのような生であるのか、想像力はどのような能力で、何をなしうるのか、という問いにも答えを与えていかなくてはならない。本書は一連の問いに対する答えを求めて諸々の著作を参照し、リクールの思索を構造化された論証として再構成することを目指す。

ところで、このような主題の設定が既に示唆しているように、リクールには〈人間が善く生きるうえで想像力

はどのような役割を果たしうるのか〉という問題を論じた単一の著作が存在しているわけではない。「善き生」や「想像力」という概念は倫理学や美学の中心的概念であるから、これらの概念にリクールが関心を抱いていなかったというのは考えられないことだし、リクールの著作にそれらに関する厚みのある論述を期待しても不当ではあるまい。だが、人間の善き生と想像力を結びつけて考えるということについては、それがたんに私の着想であるわけではなく、リクール自身の着想でもあるということを明確にしておく必要があるだろう。リクール自身が〈人間の善き生と想像力〉という主題で一冊の本を書いていてもおかしくなかった。リクールの思索の歩みを概観し、本書の主題が、諸々の著作を包括しうるリクール哲学に内在的な主題であることを確認しておくことにしたい。

2　リクールの思索の歩み——自己の解釈学

リクールは一九五〇年に、博士論文を基にした実質的なデビュー作である『意志的なものと非意志的なもの』を出版している。「意志する」ことの本質を現象学的に記述しようとしたこの著作は、『意志の哲学』の第一巻として位置づけられ、続く第二巻は『有限性と罪責性』というタイトルで一九六〇年に刊行された（なお第二巻は『過ちをおかすものとしての人間』と『悪の象徴系』という二分冊で同時に売り出され、引用の際は分冊単位で参照先を記すのがリクール研究における慣例となっている）。リクールの構想では、さらに第三巻として『意志の詩学』が続く予定であったが、実際にこの巻が公にされることはなく、『意志の哲学』はけっきょく未完のまま終わることになる。

二つの著作のタイトルを瞥見するだけでも、『意志の哲学』のなかで、リクールが人間をどのような存在としてとらえていたのか大体の見当がつく。すなわち「非意志的なもの」、「有限性」、「罪責性」、「過ち」、「悪」という言葉からは、リクールが人間をさまざまな制約に取り囲まれた不自由な存在として、また善き生を目指しつつ